

研究上の「問い」の“種”を見つけ、「問い」を組み立てる

桑畑, 洋一郎

<https://doi.org/10.15017/7388824>

出版情報 : 大学院からはじめる社会学研究 : 問いを鍛える作法 : 三隅一人教授退職記念論集, pp. 111-123, 2025-10-01. 三隅一人教授退職記念論集刊行委員会
バージョン :
権利関係 :



研究上の「問い」の“種”を見つけ、「問い」を組み立てる

桑畑 洋一郎

◎本章のねらい

研究をするためには、「これを突き詰めて考えたい」という関心の対象が必要となる。しかし場合によっては、そもそも自分がどういったものに関心を向けているのか分からない／どういったものを関心の対象とすべきか分からない、ということもあるだろう。そうした場合に、関心の対象を見つけ出し、それを研究に展開するための“種”とする方法を検討してみたい。

◎とくに読んでほしい人

あなたは、これから初めて自分で社会学の研究を始めようとしています。しかしそもそも、研究上の「問い」以前に、何を問えばいいのかよく分かっていません。

1. はじめに：「問い」の手前から

本稿は、研究の発端となる、研究上の「問い」（一般には「問題意識」や「問題関心」、「課題」「テーマ」「リサーチクエスション」と別言されることもあろう）を立てるプロセスについて、筆者の経験も踏まえながら、それがいかなるものなのか検討することとしたい。したがって、「大学院から始める」と銘打った論集でありながら、卒業論文執筆を目指し始めた段階の方が、想定読者の中心となっていることはお断りしておきたい。

なお本稿では、筆者がこれまで行ってきた、質的データを用いたいくつかの研究を事例とし、検討を進めることとする。したがって、社会学以外の領域を専門とされる読者にはピンとこないかもしれないし、社会学を専門としている読者であっても、研究者のタイプの違い（後述）や採用する方法の違いから、本稿には的外れな部分が生じるかもしれない。このこともお断りしておきたい。したがって本稿は「こうあるべき」というものではなく、「筆者はこうしている」というものとして読んでいただきたい。

ところで研究上の「問い」というものには、三隅（2025）が指摘する通り、複数の水準がある。同様に桑畑（2025）でも、研究上の「問い」と調査における「問い」と論文における「問い」とを分類して検討した。ただし本稿では、前記3種の「問い」の内、三隅（2025）が「特定化された理論仮説」とする研究上の「問い」に照準し、さらにその前段階にある、いうならば研究上の「問い」の“種”の探し方と、その“種”を芽吹かせる過程に本稿は焦点化する。すなわち、三隅（2025）でも論じられた、まず何かしらの研究対象を研究したいという問題意識を持ち、それを「問い」へと萌芽させるプロセスについて、筆者の経験を基に考えていく。

では、研究を展開するにあたって、研究上の「問い」をそもそもどのように持つのか。研究の指南書に目を向けると、そうしたプロセスは以下のように記されている。

テーマを見つけるためには、普段の生活の中でもいろいろなところにアンテナを張り巡らせ、情報を収集し、自分で考える努力が必要となるのです。（山田・林 2011: 43）

以上のように、研究上の「問い」を見つけるためには、「普段の生活の中でも」「アンテナを張り巡らせ」といった仕方で、日常生活において、将来「問い」になるかもしれないあれこれの「問い」の“種”に目を向ける必要があるとされる。ここでは、日常生活における研究者個人の関心が、将来の「問い」に展開する可能性が前提とされているわけである。

しかしそもそも「アンテナを張り巡らせ」とは一体どういうことなのか。日常に起こるすべてのことが「問い」として結実するとは限らないし、すべてのことに目を向け続けるわけにもいかない。

2. 「アンテナ」をどうやってチューニングするのか？

「アンテナ」という語には、一般に想定されがちな電波の送受信機器のみならず、昆虫の触角という意味もある。ところで、昆虫の触角であろうと電波の送受信機であろうと、送受信される物質自体は既に決まっている。したがって、研究の「問い」につながるものを探す際に、「アンテナ」という比喻だけに目を向けてしまうと、「問い」として結実する何かが自動的に飛び込んでくるような印象を受けてしまう。

一方、前節の引用文を見ると、「情報を収集し、自分で考える努力が必要」とあるように、「問い」の“種”を受け取るための「アンテナ」そのものだけでなく、「アンテナ」の持ち主である研

究者自身の能動性が必要となるものともされる。確かに、ただ待っていただけでは、「問い」の“種”は自分のところに届かないか、あるいは届いてもそれが“種”になるかどうかには気づくことができない。能動的に「アンテナ」をチューニングし、“種”を選び取る必要があるようである。

ではいかにチューニングするか。筆者の経験を基に考えてみたい。筆者は現在、複数のテーマの基で研究を展開している。その中でも比較的長期間研究し続けているものに、HTLV-1 関連疾患の社会学的研究（最も新しいもので（桑畑 2022a））がある。

HTLV-1 関連疾患そのものの詳細な説明はここでは省略するが、簡単に言えばこれは、母乳を主たる感染経路とするウイルスに感染することで発症する一連の疾患のことである。発症する疾患のタイプによっては命にかかわることもあり、感染者数は日本全国で 80 万人程度いると思われる。一方であまり知られておらず支援も少ない。そういう疾患である。

筆者はこの疾患のことを、2010 年に新聞記事で初めて知った。その記事には、この疾患に感染した女性が、母乳で育児をしたために子どもにウイルスを感染させてしまい、強い自責の念に苛まれていることや、感染を回避するために母乳育児を行わなかった女性が周囲から責められることとなったという、当事者の手記が掲載されていた（『西日本新聞』2010.5.26, 2010.6.2）。

さて、当時筆者は西日本新聞を購読していたわけではなく、web 上の記事でこれを目にしたのだが、そもそもなぜこの記事を読むに至った（≡チューニングを合わせていた）のか。

現在は筆者は使用していないが（とは言えサービス自体は現在もあるようだが）、特定のキーワードや内容を含む web 上の記事を自動的に収集する RSS リーダーを当時使用しており、筆者は、「病気」「差別」「偏見」といったキーワードを含む web 上の記事が毎日自動的に手元に届くよう設定し、それをチェックすることを日課にしていた。そこにヒットしたのがこの HTLV-1 関連疾患の記事であったというわけである。

すなわち、「アンテナ」のチューニングに近いことを実際に行いながら、後に「問い」の“種”になった記事と遭遇したのであるが、ではそもそもなぜそういうキーワードを設定していたのか。筆者は、HTLV-1 関連疾患の研究に着手する以前よりハンセン病者の生活に関する社会学的研究をしてきていた。卒業論文以降、修士論文・博士論文もこのテーマで研究を行ってきて、何ならば今も行っている（最も新しいもので（桑畑 2023））。この研究の詳細な説明もここでは省略するが、簡単に言えば、“非人道的な政策により過酷な状況に置かれてきたハンセン病者”という従来の研究で提示されてきたものとは異なる、過酷な状況を切り開く病者の主体的生の歴史をずっと追いかけてきた。

この、HTLV-1 関連疾患の研究に先立つハンセン病研究の経験から、“病気には医学的な理解とは必ずしも一致しない社会的な意味付けが存在する”“その病気を患った病者は、社会的な意味付けの下で、多くの困難を抱えた生活を送っている”“一方で困難を解消しようとする主体的営為も行っている”ということが、多くの病気に該当することを筆者は何となく認識するに至っていた。また、筆者以外の研究者が取り組んできた、病気の当事者に注目する医療社会学的研究も、上記3つの論点をほぼ含みこんでいることも認識していた。そこで、「ハンセン病以外にも、こうした、医療社会学的に研究対象となりうる病気の当事者が存在するのではないか」という関心の下で、前述の RSS リーダーを設定したという経緯である。なおちなみに、ハンセン病研究以外の研究テーマを探していたのは、ハンセン病研究を元にした博士論文を執筆した当時、ハンセン病研究も包含した、“感染症の当事者の社会学”を展開できないかと考えており、次に展開すべき（けれどもハンセン病とも接続可能で地続きな面もある）研究を探す必要性を感じていたためである（と言っても結局今もハンセン病研究を続けているわけであるが）。

課題 1) 研究の「問い」になるかどうかはさておき、関心がある事象を書き出してみよう。

3. さらにそもそもの発端

前節で見たように筆者は、それまでの研究から得てきた、「問い」の“種”を見つける際の手がかりを基に「アンテナ」をチューニングし、新たな研究の「問い」の“種”を得たわけであるが、ではさらにそもそもの、それまでの研究＝ハンセン病研究をいかに始めたのか。

筆者がハンセン病研究を始めたきっかけは、琉球大学法文学部の3年生であった2001年にさかのぼる。当時ちょうど、「らい予防法」を違憲としてハンセン病患者が国を訴えた、ハンセン病国家賠償請求訴訟において原告勝訴判決が下され、国も控訴を断念した時期であった（2001年5月）。

同年の夏季休業中に筆者の親が沖縄にやってきて、「国賠訴訟も終わったものだからハンセン病療養所に行ってみたい」と言い出し、筆者は親とともにハンセン病療養所（沖縄愛楽園）を訪問した。当時はまだ療養所を訪問する者は少なく、何の手続きもなしに療養所に入れたことを覚えている。療養所内を親とともに歩いて見学していたところ、ハンセン病患者に声を掛けられ、「ちょっとお茶でも飲んで行かないか」と言われ親とともにハンセン病患者の経験を聞かせてもらうこととなった。

その際聞かせてもらった話が、国賠訴訟で広く周知された“被害の歴史”とは必ずしも一致しないものも多く、ハンセン病者が被害の中でたくましく人生を拓いてきた様子うかがえた。そのことに関心を強く持った筆者は、卒業論文のテーマを決める必要がある時期でもあったことから、ハンセン病者へのインタビューに基づく研究を行い始めた。

筆者の親は熊本大学の教育学部で家庭科教育を担当する教員をしており、例えば、被差別部落における食文化の研究や（桑畑 1993）、水俣病患者の食生活と水俣病との関係についての研究を（今村・桑畑 2009）、主にインタビュー調査に基づいて蓄積してきた。要するに、被差別的な立場に置かれた人々の生活実態（特に食）について研究をしてきた人物である。そのため筆者も幼少期から、家庭内にあった差別問題に関わる書籍等に触れることも多く、親のインタビュー調査に同行することもしばしばあった。親にしてみれば、ハンセン病療養所への見学もある種の簡単な調査であったのかもしれない。

以上のように見てくると、筆者がハンセン病研究に、それもとりわけハンセン病者の主体的でたくましい生活の様子に関心を持ったのも、こうした幼少期からの築き上げてきた関心に根差してのことである。またさらに言えば、こうした関心が今も HTLV-1 関連疾患の研究や、あるいはもっとその他の研究における「問い」の“種”を見つけ出す、チューニングのあり方を規定しているように思われる。

阿部幸大は、マラニーとレアによる研究の手引書（Mullaney and Rea 2022=2023）を参照しながら、そこにある「“self-centered”な問いを見つける」ことの意味を検討している（阿部 2024:144）。阿部自身は、リサーチ・クエスチョンを提示する方法ではなく、アーギュメントを論証する形式の論文執筆法を解説しているが、阿部の「問い」の捉え方も参考になるため、ここで見てみたい。阿部がいう「“self-centered”な問い」とは、「世界と研究と人生がうまくリンクしている」（阿部 2024:146）ことであり、自己中心的な＝勝手な「問い」を立てるということではない。つまりは、「人生の方からトピックを眺める」（阿部 2024:146）ことを通して「問い」の“種”を見つけていくことを指す。自分と何かしらつながっているものにこそ、研究上の「問い」の“種”があるということである。阿部、あるいはマラニーとレアの指摘するように、好き／嫌いと言った感情の中身は問わず、何となく気になってしまうことが研究の「問い」の“種”となり、それをブラッシュアップする形で「問い」が形成されることもしばしばある。

同様の経験を持つ研究者は他にもいるようで、例えば歴史学者の松沢裕作が紹介するように（松沢 2024:145-6）、歴史学者の阿部謹也は、指導教員から卒業論文のテーマには「それをやら

なければ生きてゆけないというテーマを探すのですね」と言われた経験を書き記している（阿部 2007）。もちろん松沢も指摘するように、「生きてゆけない」レベルにまで深くコミットするテーマでなくてはならないわけではないだろうが、「self-centered」と同様な意味で、「何に関心を持つのかはその人次第」（松沢 2024: 146）であると言える。

研究上の「問い」をまだ見つけきれていない読者は、その“種”を探すために、自身の身近なもので、かつ自身が何かしら惹かれるものを、研究として展開することができないか検討してみるといいかもしれない。研究者であっても、結局のところ自分が知らないことはそもそも研究対象の候補にもなりえない。自身が惹かれるものには、研究に展開しうる何かしらの可能性はある。惹かれるものはあっても、「そんなものが研究になるのか」と思うかもしれないが、特に社会学では、一見研究にならなさそうなものから研究が展開することは多い。「世界と研究と人生」を「うまくリンク」させるために、自分の周囲や経験を振り返ると、「問い」につながる何かが見つかるかもしれない。この節はやや“べき論”になっているが、筆者も経験的にそう感じる部分がある。

課題 2) 課題 1 で書きだした事象への関心が、自分のどういう経験から出てきたのか検討してみよう。

4. 得た“種”を少し研究に近づけるためのポイント

とは言え、「問い」の“種”となるものはそのままではあくまでも“種”である。

上述のように筆者は、社会学においては、大抵の“種”は研究上の「問い」として展開可能だと考えている（展開された「問い」が、社会的に重要であることを論文中で示す必要性はあるが）。ただし“種”を研究上の「問い」とするためにはブラッシュアップが必要だし、ブラッシュアップの方法も複数あると思われる。続いてはそのことを考えてみたい。

三隅（2025）も「レビューという問いの本質」として指摘するように、先行研究を検討していくことで「問い」を明確化していくことが研究においては必要だが、ここまでの話と同様、ここからの話もまた、その前段階の話である。いうならば、レビュー以前に、“種”をもう少し「問い」に近づけるための準備作業（＝そもそも自分が何をレビューすべきか見定めていく作業）を、ここでも筆者の経験を基に検討してみたい。

筆者は、自身が惹かれた「問い」の“種”を、「問い」として展開する際に以下の3つのポイント（1つとは限らず複数に関連することもあるが）、を意識するようにしている。この3つのポイントが、筆者なりの「社会学的想像力」（Mills 1959=2017）の具現化である。

第1に、その“種”から“社会”の影響が見えるかどうかというポイントである。筆者は社会学者であると自認しているので、そうである以上、研究とするならば、取り上げる事象を通して何かしらの形で“社会”を語りたいという思いがある。したがって、自身が惹かれた“種”が、単なる「こういう事象があります」に留まらず、「この事象はこういう背景から生まれたと考えられます」に展開できないかどうかを検討することとしている。

例えば筆者は、就学前の幼児向け雑誌『幼稚園』の付録の歴史的変遷を追い、付録の変遷を生んだ社会的背景を考察したことがある（桑畑 2020）。この研究は、筆者が子に買った同誌の付録に対して、違和感を持ったことが発端であった。論文には書いていないが（当たり前だが）、筆者が違和感を持った付録は、ゲームセンターにあるメダル落としゲームのミニチュアの付録であり、同誌は小学館の発行するものでありながら、付録には「SEGA」と他企業の名前が明記されていた。「コラボ付録」と言われるものであり、出版社と他企業が提携し、付録を通して他企業への消費へと読者を誘導するものである。就学前の幼児にすら「コラボ付録」を通して消費へ仕向けられていることと、そもそもの付録の射幸性の高さに筆者は違和感を持った（これも論文には当然ながら書いていないが）。

要するに、この研究における「問い」の“種”とは、「この付録は一体何なんだ？」という違和感であると言える。また筆者の場合、この“種”の出所は、「子どもも消費者と見ること・子どもにこういうものを与えることがアリとされているのか？」という違和感である。

つまりは、違和感を持つことを通して、これまで何となく読んできた子ども観をめぐる社会学的研究で示されてきた、「庇護され教育されるべき子ども」という像からズレるような付録であることに驚き、しかしそうした付録も、それを生んだ現代社会の子ども観を反映しているであろうという可能性に気づいたというわけである。「人生の方から」、付録という「トピックを眺める」ことで違和感を持ち、その違和感を基に「問い」を自分のなかで定式化できていったわけである。またさらに、そうして導かれた「問い」を基に、先行研究として、雑誌や付録をめぐる社会学的研究のみならず、広告やマーケティングの研究、子ども観の研究といった、レビューすべき範囲も見えてくることとなった。

このように、その“種”のどういう部分に、自分が善かれ悪しかれ惹かれるのかということを検討しながら、“種”を通して“社会”を見ることができるかどうかを考えることで、徐々に「問い」へと近づいていくことが可能となる。

第2に、その“種”から、社会を多かれ少なかれ変えるような何かが見出せるかどうかというポイントである。筆者の場合だと、ハンセン病研究や HTLV-1 関連疾患の研究を展開する際に強く意識したものである。

このポイントも、先と同様取り上げる事象を通して何かしらの形で“社会”を語りたいという思いに基づくものであるが、こちらのポイントに関連する研究の場合は、第1のポイントとは影響の方向を逆向きに、“社会”を語ろうとすることとなる。つまり、第1のポイントが、何かしらの社会的背景から“種”が影響を受けたのではないかという見方であるのに対して、第2のポイントは、“種”が何かしらの新たな形で“社会”を生み出そうとしていないかという見方であるという違いがある。「社会→“種”」という図式で語れそうか、「“種”→社会」という図式で語れそうか、という違いである。特にこれは、筆者の場合、マイノリティとされる立場の人々に関心が向いた際に関連付けられやすい。

「問い」の“種”がマイノリティに関わる場合、対象がマイノリティである以上、そうした人々は社会の中で抑圧的な位置に置かれていて、既にこの時点で「社会→“種”」であることが前提とされている。マイノリティを取り上げて、「この人たちは社会的にこういう経緯でマイノリティとされています」と見ることも重要であるが、それだけだと研究が行き詰ってしまうことが経験的には多いし、そもそも「マイノリティとされています」で終わってしまっ、それで現状を捉えたことになるのかという思いも、少なくとも筆者にはある。「それだけ？」と感じてしまうのである。むしろ、困ったことを抱えた際にそれを打開すべく人々が集合的にあれこれやることも、社会においては普遍的であるし、そうした集合的なあれこれを記述し、その意味を分析することも社会学の役割なのではとも筆者は考えている。

ということで、筆者は、マイノリティに研究上の関心が向き、そこに「問い」の“種”を見つけた際には特に、そうした人々がどのような営為をし、そこからどのように状況を打開しようとしており、それが社会をどう変えようとしていることが見出せそうか、と考えることが多い。こうしたことから、ハンセン病研究においては、療養所を退所したハンセン病患者が、既に病気は治癒しているのにいまだに医療利用の際に制約が生じており、それを打開するためにあれこれやっていることを捉え考察できたし（桑畑 2011）、HTLV-1 関連疾患の研究においては、当事

者団体が臨床試験という専門性の高い領域に参加し、非専門家として関与を続けることで状況を変えようとしていることを論じることができた(桑畑 2022b)。またそれが見定められたために、ハンセン病研究では、M. セルトーの「実践」の論理(Certeau 1980=1987)を押さえることが見えてきたし、HTLV-1 関連疾患の研究では、HTLV-1 関連疾患以外の慢性疾患当事者の語りの研究((前田・西村 2018 など))や、N. ローズ(2007=2014)の「生物学的シティズンシップ」論を押さえるべきことが見えることとなった。

以上のように、この、「こういう経緯で苦しんでいる人々がいる」「一方でそうした人々は状況を変えようとしている」が語れそうかどうかというポイントも、「問い」の“種”を「問い」へと近づけるきっかけになりうるものであろう。ただし注意しておかないといけないのは、この“種”は、苦しんでいる対象でなければ見出せないわけでもないし、苦しみ解消に向かう変化でなければ見出せないわけでもない、ということである。何かしらの人々によって導かれる何かしらの変化(それがあろう立場からは非合理的な変化と判断されるものも含めて)であれば、この第2のポイントに関連付けた“種”を見出すことができるだろう。

ちなみに、この第1・第2のポイント、先に書いた親の研究からの影響も大きく受けているものであると思われる。その意味で、こうしたポイントを通して「問い」の“種”を見る筆者の思考スタイルは、「self-centered」なものなのだろうと思う。

第3のポイントは、マイノリティであるかマジョリティであるかに関わらず、特定集団内で行われていることが記述可能かどうか、というポイントである。これは、ある集団内で行われていることを記述することには、「人々の社会生活の一端を明らかにするという点」(秋谷・團・松井編 2021: 17)で社会学的に意味があるという、エスノメソドロジーからの示唆を受けて導きだされたものである。特定の集団内で何かが行われているからには、それが行われていることが集団内で理解可能となっており、そうした行いを成立させる秩序が存在するということがある。「この人たちはこういうことをやっています」を記述し、「そのことはこういう仕組みで成り立っています」を記述することは、特定集団のものであっても集団内秩序の研究になる。こうしたポイントに着目することにより、社会秩序を明らかにしようとしてきた社会学と(捉え方やスタンスは異なれども)共通するものを見ることが可能になりうるわけである(前田ほか編 2007: 58-63)。したがってこのポイントにおいては、“種”として見つかったものが、何かしらの形で根拠を伴って記述可能かどうかという点が重要になる。筆者の場合だと、この第3のポイントを意識したものは、スケートボード研究((桑畑 2022a) など)である。

筆者は高校生時代よりスケートボードを趣味としていたため、研究にすることはなくとも、社会学系のスケートボード研究には（ほぼ単に趣味の延長として）目を通していた。スケートボード研究の多くは、都市社会学やカルチュラル・スタディーズからのものであり、そこでは、スケートボーダーには比較的下層の若年者が多いことや、スケートボーダーの存在により都市の意味が変容する可能性があるといったことが指摘されていた。

筆者も「まあそれはそうだろう」と思いつつ、そうした方面での研究を新たにやる気にもならなかったのであるが、2021 年ごろより、「スケートボーダーの世界で特徴的に用いられている技法的なものがあるのではないか」ということが気になり始めた。これは、ちょうど同時期に、HTLV-1 関連疾患の研究関係で参加させてもらうことになった、前田泰樹（前田・西村 2018）の著者の 1 人で、エスノメソドロジストでもある）主催の研究会等や、同じ山口大学に所属する秋谷直矩とやり取りすることで、エスノメソドロジーに触れる機会が増えたことが大きい。こうした経験から、「この人たちはこういうことをしています」と記述する研究の面白さと可能性を認識するに至っていたことも背景にある。したがってこのポイントも、研究の過程や所属先で偶然知り合った研究者からの示唆を、他の研究に援用しているという意味で、これも「self-centered」なものなのであろう。

なお、この第 3 のポイントは、スケートボード研究に限らずそれなりに多くの“種”に適用可能なもののようで、天理教里親の研究（最も新しいもので（桑畑 2024））で「天理教里親は何をしているのか」という「問い」を導き出す際にも意識したものでもある。

課題 3) 課題 1 で書きだした事象を、4 節で述べたポイントから（もしくはその他社会学的展開が見込めそうなその他の観点でも可）、研究で何を問いたいと考えてみよう。

5. おわりに：事象先行型と概念先行型と方法先行型、研究の「問い」と論文の「問い」

以上のように、「問い」の“種”のを見つけ方と、それを「問い」に近づける方法を、筆者の経験に則して見てきた。本稿を閉じるにあたって、ここまで見てきたことの限界について、あらためていくつか断り書きをしておかないといけないこともある。

まず本稿で見てきたプロセスの適用範囲や適用可能性は、研究者のタイプによっても左右される部分もあるように思われる。

筆者は基本的に、「問い」の“種”になりそうなものを見つける場合、「何だか面白い事象があるな」というところから出発することが多い。事象が先にあり、その研究的な面白さを徐々に固め、その過程で先行研究や接続しうる社会学的概念や理論を検討していく流れを取るタイプである。筆者はこうした、事象先行型の思考で研究を展開するタイプである。ゆえに本稿で述べてきたことはそうしたタイプの者の経験に基づくものであることは否めない。

一方、既に提示されている社会学的概念や理論に面白みを感じ、それを具体的な事象にいかに応用できるか、適用した場合新たに面白い発見があるか、といった流れで研究を展開していくタイプの研究者もいるように思われる。概念先行型のタイプである。こうした研究者は、おそらく「問い」の“種”を論文等から発見していくことが多いのであろうし、このタイプの研究者には、本稿で述べてきたことは、あまり該当しないだろう。

さらに、調査方法／分析方法に面白みを感じ、自身が面白みを感じた方法を生かすための事象を探し、分析を通して方法の洗練を目指すといった流れで研究を展開していくタイプの研究者もいると思われる。方法先行型のタイプである。こういうタイプの研究者も、本稿で述べてきたことに齟齬を感じるかもしれない。

また、本稿で述べてきたのは、研究上の「問い」に関わるものであり、調査における「問い」や論文における「問い」はまた別種のプロセスから組み立てられるものであることも、最後に述べておきたい。例えば筆者の場合だと、研究上の「問い」を調査において対象者にそのまま示すことはなく、対象者の生活感覚に近い言葉に置き換えたり、具体性を増して問うたりすることの方が多い。またそもそも、本稿で述べてきた通り、研究上の「問い」は調査着手前に確固としたものとしてあるわけではなく、「問い」の“種”が見えた状況で、調査（的な行為）に着手することで徐々に「問い」となることの方が、筆者の場合は多い。

したがって、本稿で述べてきた研究上の「問い」は、調査における「問い」や論文における「問い」よりも抽象度の高いものである。また、調査着手から始まる往還的なプロセスから、研究上の「問い」が洗練され、さらにそれを具体化・細分化される形で調査における「問い」が導き出されていくものでもある。さらに、そうしたプロセスから得られた回答＝結果から逆算されながら論文における「問い」が組み立てられていくこととなる。この、往還的なプロセスや、調査における「問い」と論文における「問い」については、桑畑（2025）で述べることにするが、ここでも簡単に断り書きをしておく。

以上のように、本稿で述べてきたことは、複数の点で不完全なものではあるが、こうした、研究者が感覚頼りにやっていると思われがちなものを、経験を基にできる範囲で言語化しておくことは、特に研究を始めたばかりの方へのささやかなヒントとして役立つ部分もあるだろう。本稿の意義はその点にある。

文献

阿部謹也，2007，『自分のなかに歴史をよむ』筑摩書房。

阿部幸大，2024，『まったく新しいアカデミック・ライティングの教科書』光文社。

秋谷直矩・團康晃・松井広志編，『楽しみの技法——趣味実践の社会学』ナカニシヤ出版。

Certeau, M., 1980, *Art De Faire*, Paris: Union Generale d' Editions. (山田登世子訳，1987，『日常実践のポイエティック』国文社.)

今村桂子・桑畑美沙子，2009，「不知火海沿岸漁民の魚食文化——水俣病発生前の女島における聞き取り調査に基づいた再現調査による魚介類摂取量」『会誌食文化研究』5: 13-23.

桑畑美沙子，1993，「熊本の戦前における肉食の地域的考察——屠場を有する都市部の被差別部落の場合」『熊本大学教育学部紀要人文科学』42: 75-89.

桑畑洋一郎，2020，「文化産業における子ども像とその変遷——幼児雑誌の付録への分析を通して」『現代の社会病理』35: 47-63.

———，2022a，「身体技法の教示と修得に関する一考察——スケートボードのハウトゥ動画を題材に」『異文化研究』16: 43-57.

———，2022b，「病いの当事者にとって臨床試験とは何か—— HTLV-1 関連疾患当事者の〈治験の語り〉から」『社会学評論』73(1): 37-54.

———，2023，「ハンセン病史はいかに教訓とされたか」『山口大学文学会志』73: 1-22.

———，2024，「信仰に基盤を置いた支援——天理教里親を事例に」『西日本社会学会年報』22: 25-39.

———，2025，「研究上の『問い』・調査における『問い』・論文における『問い』」『大学院から始める社会学研究——問いを鍛える作法』，第9章。

前田泰樹・西村ユミ，2018，『遺伝学の知識と病いの語り——遺伝性疾患をこえて生きる』ナカニシヤ出版。

前田泰樹・水川喜文・岡田光弘編，2007，『エスノメソドロジー——人々の実践から学ぶ』新曜社。

松沢裕作, 『歴史学はこう考える』 筑摩書房.

Mills, C., W., 1959, *The Sociological Imagination*, Oxford: Oxford University Press. (伊奈正人・中村好孝
訳, 2017, 『社会学的想像力』 筑摩書房.)

三隅一人, 2025, 「社会関係資本から社会学的問いを鍛える」『大学院から始める社会学研究——問
いを鍛える作法』, 第 15 章.

Mullaney, T., S. and Christopher Rea, 2022, *Where Research Begin: Choosing a Research Project That Matters
to You (and the World)*, Chicago: University of Chicago Press. (安原和見訳, 2023, 『リサーチのはじ
め方——「きみの問い」を見つけ、育て、伝える方法』 筑摩書房.)

Rose, N., 2007, *The Politics of Life Itself: Biomedicine, Poser, and Subjectivity in the Twenty-First Century*,
Princeton: Princeton University Press. (桧垣立哉監訳, 小倉拓也・佐古仁志・山崎吾郎訳, 2014,
『生そのものの政治学——二十一世紀の生物医学, 権力, 主体性』 法政大学出版局.)

山田剛史・林創, 2011, 『大学生のためのリサーチリテラシー入門——研究のための 8 つの力』 ミネ
ルヴァ書房.